The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	簡帛『老子』諸本の系譜学的考察
Author(s)	福田, 哲之
Citation	中国研究集刊. 2015, 60, p. 53-72
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58641
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　称号（総六十号記念号）平成二十七年六月　五三―七二頁

簡帛『老子』諸本の系譜学的考察

福田哲之

一、序言

馬王堆漢墓帛書『老子』（馬王堆本）、郭店楚墓竹簡『老子』（郭店本）に続く第三の発見となる北京大学蔵西漢竹書『老子』（北大本）が従来の『老子』研究にさらなる進展をもたらすことは言うまでもないが、文献学的な観点からとくに重視されるのは以下の二点である。

第一は、北大本が馬王堆本とは異なる別系のテキストに属する点である。馬王堆本は西漢期に書写された二種テキスト（甲本・乙本）が出土した点で画期的な意義を有したが、その一方、両本は祖本を同じくする同系統のテキストであったため、新たに浮上した問題も少なくなかった。北大本の発見によって、漢代『老子』諸本の多様な実態の一端が明らかとなり、馬王堆本についても、北大本との比較検討を通してより明瞭な位置づけが可能となるのではないかと期待される。

第二は第一ともかかわるが、すでに整理者の韓巍氏（注1）が指摘するように、北大本は郭店本・馬王堆本と伝世本とをつなぐ懸け橋となる点である。北大本は馬王堆本に比して伝世本とのあいだに密接な関係をもつと見られ、『老子』諸本の成立と展開の過程について、一定の見通しを立てることが可能となるのではないかと期待される。

こうした新たな状況を踏まえ、本稿では漢代におけるテキストの実態を明らかにし、戦国期の郭店本から漢代の馬王堆本・北大本を経て伝世本へと至る流れの大枠を把握するための基礎作業として、『老子』諸本の異文統

合を行ない、簡帛諸本を中心とする系譜の建設を試みてみたい（注2）。

二、異文統合

異文統合に際してとくに注目すべきは、『老子』諸本中に認められる句単位の異文の有無にかかわる異同である。すでに指摘されるように『老子』は格言や警句などからなる箴言集的性質をもち、時代を経るにしたがって比較的未整理な本文から形式的に整った本文へと変化していく傾向が看取される。こうした状況は他の古典にも共通する一般的傾向とも言えるが、とくに『老子』には増益とみられる句単位の異文が少なからず認められ、テキスト相互の血縁関係を明らかにする上で重要な指標となる。

このような意図にもとづき異文統合を試みた結果、句単位の異文の有無と諸本との関係は、第Ⅰ類・第Ⅱ類・第Ⅲ類および第ⅱ類の四種に類別される。やや多量にわたるが系譜建設において重要な根拠となるため、以下に各類の異同を列挙しておく。なお異同の表示については、便宜上、以下の各項に従った。

（一）釈文は異文（句）を含む該当部分を掲げ、一部に通行の字体を用い、重文符号については文字を重ねて示した。

（二）異文（句）のあるテキストについては、当該本文を枠で囲んで示し、異文（句）のないテキストについては、その場所を＜で示した。

（三）伝世本（王弼本・河上公本・傅奕本）に共通する異文（句）は、煩雑さを避けて王弼本のみを代表として掲げ、文字の異同については逐一の注記を省略した。

第Ⅰ類　郭店本なし／馬王堆本・北大本・厳遵本・想爾注本・伝世本あり

①北大本第18章・通行本第55章（想爾注本缺）

［郭甲］勿壓則老、是胃不道。＜（簡35）
［馬甲］□□即老、胃之不道、$\boxed{\text{不道□□}}$。
［馬乙］物□則老、胃之不道、$\boxed{\text{不道蚤已}}$。
［北大］物壯則老、謂之不道、$\boxed{\text{不道蚤已}}$。
［厳遵］物壯則老、謂之非道、$\boxed{\text{不道早已}}$。
［王弼］物壯則老、謂之不道、$\boxed{\text{不道早已}}$。

②北大本第58章・通行本第15章（厳遵本缺）

［郭甲］古之善爲士者、必非溺玄達、深不可志。＜是以

爲之頌。夜虐□奴冬涉川、猷虐亓奴愄四叜、敢虐亓奴客、𩞁虐亓奴懌、屯虐亓奴樸、坉虐亓奴濁。＜竺能濁以束者、牆舍清。竺能庀以迮者、牆舍生。保此衍者不谷堂呈。＜（簡8—10）

［馬甲］（当該部分残缺……）深不可志。夫唯不可志、故强爲之容曰。與呵其若冬□□、□□□□畏四□、□呵其若客、渙呵其若淩澤、□呵其若楃、湷□□□□、□□□若浴。濁而情之余清、女以重之余生。葆此道不欲盈、夫唯不欲□、□以能□□□成。

［馬乙］古之□爲道者、微眇玄達、深不可志。夫唯不可志、故强爲之容曰。與呵亓若冬涉水、猷呵亓若畏四叜、嚴呵亓若客、渙呵亓若淩澤、沌呵亓若樸、湷呵亓若濁。涎呵亓若浴。濁而靜之徐清、女以重之徐生。葆此道□□欲盈（注3）、是以能𢿱而不成。

［北大］古之爲士者、微眇玄達、深不可識。夫唯不可識、故强爲之頌曰。就虖其如冬涉水、猶虖其如畏四鄰、嚴虖其如客、渙虖其如冰之澤、杶虖其如樸、沌虖其如濁。廣虖其如浴。孰能濁以靜之、徐清。孰能安以動之、徐生。抱此道不欲盈、夫唯不盈、是以能敝不成。

［想爾］古之善爲士者、微妙玄通、深不可識。夫唯不可識、故彊爲之容。豫若冬涉川、猶若畏四鄰、儼若客、散若冰將汋、混若樸、曠若谷、肫若濁。濁以靜之徐清。安以動之徐生。保此道者不欲盈、夫唯不盈、能弊復成。

［王弼］古之善爲士者、微妙玄通、深不可識。夫唯不可識、故强爲之容。豫焉若冬涉川、猶兮若畏四鄰、儼兮其若容、渙兮若冰之將釋、敦兮其若樸、曠兮其若谷、混兮其若濁。孰能濁以靜之、徐清。孰能安以久動之、徐生。保此道者不欲盈、夫唯不盈、故能蔽不新成。

③北大本第60章・通行本第18章（厳遵本缺）

［郭丙］古大道癹、安又息義、＜六斬不和、安又孝孳、邦豢緡亂、安又正臣。（簡2—3）

［馬甲］故大道廢、案有仁義、知快出、案有大僞、六親不和、案有畜茲、邦家閭亂、案有貞臣。

［馬乙］故大道廢、安有仁義、知慧出、安有□□、六親不和、安又孝茲、國家閭亂、案有貞臣。

［北大］故大道廢、安有仁義、知慧出、安有大僞、六親不和、安有孝茲、國家揗亂、案有貞臣。

［想爾］大道廢、有仁義、智慧出、有大僞、六親不和、

有孝慈、國家昏亂、有忠臣。

［王弼］大道廢、有仁義、慧知出、有大僞、六親不和、有孝慈、國家昏亂、有忠臣。

④北大本第71章・通行本第30章（厳遵本缺）

［郭甲］以衍差人宝者、不谷以兵弖於天下。〈善者果而已、不以取弖。果而弗發、果而弗喬、果而弗矜。〈是胃果而不弖、亓事好長(注4)。〈（簡6―8）

［馬甲］以道佐人主、不以兵强□天下、□□□□。□□所居、楚朴生之。善者果而已矣、毋以取强焉。果而毋驕、果而勿矜、果而□□、果而毋得已居、是胃□而不强。物壯而老、是胃之不道、不道蚤已。

［馬乙］以道佐人主、不以兵强於天下、亓□□□。□□□□、□棘生之。善者果而已矣、毋以取强焉。果而毋驕、果而勿矜、果□□伐、果而毋得已居、是胃果而强。物壯而老、胃之不道、不道蚤已。

［北大］以道佐人主、不以兵强於天下、其事好還。師之所居、楚棘生之。善者果而已、不以取强。故果而毋矜、果而毋驕、果而毋發、果而毋不得已(注5)。物壯則老、謂之不道、不道蚤已矣。

［想爾］以道佐人主者、不以兵彊天下、其事好還。師之所處、荊棘生。故善者果而已、不以取彊。果而勿驕、果而勿矜、果而勿伐、果而不得已、是果而勿彊。物壯則老、謂之非道、非道早已。

［王弼］以道佐人主者、不以兵强天下、其事好還。師之所處、荊棘生焉。大軍之後、必有凶年。善者果而已、不敢以取强。果而勿矜、果而勿伐、果而勿驕、果而不得已、果而勿强。物壯則老、是謂不道、不道早已。

⑤北大本第72章・通行本第31章（厳遵本缺）

［郭丙］〈君子居則貴左、甬兵則貴右。古曰、兵者、□□□□□。〈□(注6)𡧊已而甬之、鏞纊爲上、弗妩也。（簡6―7）

［馬甲］夫兵者、不祥之器□、物或惡之、故有欲者弗居。君子居則貴左、用兵則貴右。故兵者、非君子之器也。□□、不祥之器也。不得已而用之、銛襲爲上、勿美也。

［馬乙］夫兵者、不祥之器也、物或亞□□□□□□。□子居則貴左、用兵則貴右。故兵者、非君子之器。兵者、不祥□器也。不得已而用之、銛懱爲上、勿美也。

[北大] 夫觧美、不恙之器也、物或惡之、故有欲者弗居也。是以君子居則貴左、用兵則貴右。兵者、非君子之器也、不恙之器也。不得已而用之、恬僂爲上、弗美。

[想爾] 夫佳兵者、不祥之器、物或惡之、故有道不處。君子居則貴左、用兵則貴右。兵者、不祥器、非君子之器。不得已而用之、恬惔爲上、故不美。

[王弼] 夫佳兵者、不祥之器、物或惡之、故有道者不處。君子居則貴左、用兵則貴右。兵者、不祥之器、非君子之器。不得已而用之、恬淡爲上、勝而不美。

第Ⅱ類　郭店本・馬王堆本なし／北大本・厳遵本・想爾注本・伝世本あり

⑥北大本第1章・通行本第38章

（郭店本不見・想爾注本缺）

[馬甲] 上德无□□无以爲也。＜上仁爲之□□以爲也。

[馬乙] 上德无爲而无以爲也。＜上仁爲之而无以爲也。

[北大] 上德無爲而無以爲。下德□之而無以爲。上仁爲之而無以爲。

[厳遵] 上德無爲而無不爲。下德爲之而有以爲。上仁爲之而無以爲。

[王弼] 上德無爲而無以爲。下德爲之而有以爲。上仁爲之而無以爲。

⑦北大本第35章・通行本第71章

（郭店本不見・想爾注本缺）

[馬甲] 不知不知、病矣。＜是以＜聖人之不病、以亓

（……以下残缺）

[馬乙] 不知知、病矣。＜是以＜耶人之不□也、以亓病病也、是以不病。

[北大] 不智智、病矣。夫唯病病、是以不病。聖人□□病、以其不病□□、□□不病。

[厳遵] 不知知、病。夫唯病病、是以不病。聖人不病、以其病病、是以不病。

[王弼] 不知知、病。夫唯病病、是以不病。聖人不病、以其病病、是以不病。

⑧北大本第64章・通行本第23章

（郭店本不見・厳遵本缺）

[馬甲] 同於德□、道亦德之。同於□者、道亦失之。＜

[馬乙] 同於德者、道亦德之。同於失者、道亦失之。＜

[北大] 故同於道者、道亦得之。同於失者、道亦失之。信不足、安有不信。

[想爾] 同於德者、德得之。同於失者、道失之。信不足、有不信。

[王弼] 同於道者、道亦樂得之。同於德者、德亦樂得之。同於失者、失亦樂得之。信不足、焉有不信焉。

⑨北大本第66章・通行本第25章（厳遵本缺）

[郭甲] 敓繆、蜀立不亥、<可以爲天下母。（簡21）

[馬甲] 繡呵繆呵、獨立□□□、<可以爲天地母。

[馬乙] 蕭呵漻呵、獨立而不玄、<可以爲天地母。

[北大] 肅覺、獨立而不孩、偏行而不殆、可以爲天地母。

[想爾] 寂漠、獨立不改、周行不殆、可以爲天下母。

[王弼] 寂兮寥兮、獨立不改、周行而不殆、可以爲天下母。

第Ⅲ類　郭店本・馬王堆本・北大本・厳遵本なし／伝世本あり／想爾注本⑮なし、⑫⑬⑭⑯あり

⑩北大本第2章・通行本第39章

（郭店本不見・想爾注本缺）

[馬甲] 昔之得一者、天得一以清、地得□以寧、神得一以霝、浴得一以盈、<侯□□而以爲正。亓至之也、胃天毋已清將恐□、胃地毋□□將恐□、胃神毋已霝□恐歇、胃浴毋已盈將恐渴、<胃侯王毋已貴□□□□□。

[馬乙] 昔得一者、天得一以清、地得一以寧、神得一以霝、浴得一以盈、<侯王得一以爲天下正。亓至也、胃天毋已清將恐蓮、地毋已寧將恐發、神毋□□□恐歇、谷毋已□將渴、<侯王毋已貴以高將恐歇。

[北大] 昔得一者、天得一以精、地得一以寧、神得一以靈、谷得一以盈、<侯王得一以爲正。其致之也、天毋已精將恐死、地毋已寧將恐發、神毋已靈將恐歇、谷毋已盈將恐渴、<侯王毋已貴以高將恐厥。

[厳遵] 昔之得一者、天得一以清、地得一以寧、神得一以靈、谷得一以盈、<侯王得一以爲天下正。其致之、天無以清將恐裂、地無以寧將恐發、神無以靈將恐歇、谷無以盈將恐竭、<侯王無以爲正而貴高將恐蹷。

[王弼] 昔之得一者、天得一以清、地得一以寧、神得一以靈、谷得一以盈、萬物得一以生、侯王得一以爲天下貞。其致之、天無以清將恐裂、地無以寧將恐發、神無以靈將恐歇、谷無以盈將恐竭、萬

物無以生將恐滅、侯王無以貴高將恐蹶。

⑪北大本第37章・通行本第73章

（郭店本不見・想爾注本缺）

［馬甲］（当該部分残缺……）不言而善應、不召而自來、彈而善謀。（……以下残缺）

［馬乙］天之所亞、孰知亓故。＜天之道、不單而善朕、不言而善應、弗召而自來、單而善謀。天罔䋣䋣、疏而不失。

［北大］天之所惡、孰智其故。＜天之道、不爭而善勝、不言而善應、弗召自來、譙然善謀。天罔怪怪、疏而不失。

［嚴遵］天之所惡、孰知其故。＜天之道、不爭而善勝、不言而善應、不召而自來、坦然而善謀。天網恢恢、疏而不失。

［王弼］天之所惡、孰知其故。是以聖人猶難之。天之道、不爭而善勝、不言而善應、不召而自來、繟然而善謀。天網恢恢、疏而不失。

⑫北大本第53章・通行本第10章

（郭店本不見・嚴遵本缺）

［馬甲］生之畜之、生而弗（当該部分残缺……）德。

［馬乙］生之畜之、生而弗有、＜長而弗宰也、是胃玄德。

［北大］故生之畜之、生而弗有、＜長而弗宰、是謂玄德。

［想爾］生之畜之、生而不有、爲而不恃、長而不宰、是謂玄德。

［王弼］生之畜之、生而不有、爲而不恃、長而不宰、是謂玄德。

⑬北大本第54章・通行本第11章

（郭店本不見・嚴遵本缺）

［馬甲］（当該部分残缺……）當其无、有□之用也。

［馬乙］鑿戸牖＜、當亓无、有室之用也。

［北大］鑿戸牖＜、當其無、有室之用也。

［想爾］鑿戸牖以爲室、當其无、有室之用。

［王弼］鑿戸牖以爲室、當其無、有室之用。

⑭北大本第65章・通行本第24章

（郭店本不見・嚴遵本缺）

［馬甲］炊者不立、＜自視不章、□見者不明、自伐者无功、自矜者不長。

［馬乙］炊者不立、＜自視者不章、自見者不明、自伐者

无功、自矜者不長。

［北大］炊者不立、＜自見者不明、自視者不章、自發者無功、矜者不長。

［想爾］喘者不久、跨者不行、自見不明、自是不彰、自饒無功、自矜不長。

［王弼］企者不立、跨者不行、自見者不明、自是者不彰、自伐者無功、自矜者不長。

⑮北大本第71章・通行本第30章（厳遵本缺）

［郭甲］以術差人宰者、不谷以兵弭於天下。＜善者果而已、不以取弭。（簡6―7）

［馬甲］以道佐人主、不以兵强□天下、□□□□。□□所居、楚朸生之。＜善者果而已矣、毋以取强焉。

［馬乙］以道佐人主、不以兵强於天下、亓□□□。□□□□、□棘生之。＜善者果而已矣、毋以取强焉。

［北大］以道佐人主、不以兵强於天下、其事好畏。師之所居、楚棘生之。＜善者果而已、不以取强。

［想爾］以道佐人主者、不以兵彊天下、其事好還。師之所處、荊棘生。＜故善者果而已、不以取彊。

［王弼］以道佐人主者、不以兵强天下、其事好還。師之所處、荊棘生焉。大軍之後、必有凶年。善有果而已、不敢以取强。

⑯北大本第77章・通行本第37章（厳遵本缺）

［郭甲］術亙亡爲也。＜侯王能守之、而萬勿牆自爲。（簡13）

［馬甲］道恆无名。＜侯王若守之、萬物將自爲。

［馬乙］道恆无名。＜侯王若能守之、萬物將自化。

［北大］道恆無爲。＜侯王若能守之、萬物將自化。

［想爾］道常無爲而無不爲。王侯若能守、萬物將自化。

［王弼］道常無爲而無不爲。侯王若能守之、萬物將自化。

第ⅱ類　北大本・厳遵本・伝世本なし／馬王堆本あり

⑰北大本第38章・通行本第74章

（郭店本不見・想爾注本缺）

［馬甲］□□□□□□奈何以殺悳之也。若民恆是死、則而爲者、吾將得而殺之、夫孰敢矣。若民□□必畏死、則恆有司殺者。夫伐司殺者殺、是伐大匠斲也。

［馬乙］若民恆且畏不畏死、若何以殺矐之也。使民恆且畏死、而爲畸者、□得而殺之、夫孰敢矣。若民恆且必畏死、則恆又司殺者。夫代司殺者殺、是代大匠斲。

［北大］民恆不畏死、奈何其以殺懼之也。若使民恆不畏死、而爲畸者、吾得而殺之、夫孰敢矣。＜恆有

司殺者、夫代司殺者殺、是代大匠斲也。

［厳遵］民不畏死、奈何以死懼之。若使民常畏死、而爲奇者、吾得執而殺之、夫孰敢矣。＜常有司殺者殺、而代司殺者殺、是代大匠斲。

［王弼］民不畏死、奈何以死懼之。若使民常畏死、而爲奇者、吾得執而殺之、孰敢。＜常有司殺者殺、夫代司殺者殺、是謂代大匠斲。

三、系譜の建設

前章における異文統合の結果をまとめると表1のようになる。第Ⅰ類①―⑤は、郭店本になく、馬王堆本・北大本・厳遵本・伝世本にある異文であり、これらを共有する馬王堆・北大・厳遵・伝世共通の祖本Ⅰが設定される。第Ⅱ類⑥―⑨は、郭店本・馬王堆本になく、北大本・厳遵本・伝世本にある異文であり、これらを共有する北大・厳遵・伝世共通の祖本Ⅱが設定される。第Ⅲ類⑩―⑯は、郭店本・馬王堆本・北大本・厳遵本になく、伝世本にある異文であり、これらを共有する伝世共通の祖本Ⅲが設定される。

なお敦煌の莫高窟から発見された想爾注本は、上篇（通行本の第三章の途中から第三十七章まで）のみの残巻であり、全体的には伝世本と共通する面が多いが、⑮のように独自に簡帛諸本との合致を示す例も認められる。ただし資料上の制約もあって、現時点では系統的な関連性を見いだすことは困難であり、他系統本文との混成も予想されるため、以下の検討の対象からは除外しておきたい。

ここで注目されるのは、図1に示したように祖本Ⅰ（①―⑤）→祖本Ⅱ（①―⑨）→祖

表1　句単位の異文の有無に注目した異文統合表

類別	Ⅰ					Ⅱ				Ⅲ							ii
異文	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰
郭店	×	×	×	×	×	—	—	—	×	—	—	—	—	—	×	×	—
馬甲	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○
馬乙	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○
北大	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×
厳遵	○	—	—	—	—	○	○	—	—	×	×	—	—	—	—	—	×
想爾	—	○	○	○	○	—	—	○	○	—	—	○	○	○	×	○	—
伝世	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×

本Ⅲ（①―⑯）と異文数が累加している点である。こうした状況は、祖本Ⅰ（馬王堆・北大・厳遵・伝世共通）、祖本Ⅱ（北大・厳遵・伝世共通）、祖本Ⅲ（伝世共通）が、それぞれ第Ⅰ類・第Ⅱ類・第Ⅲ類の異文を媒介とした血縁関係にあることを示しており、これらを祖本とする諸本は一連の系統線上に位置づけられる。

一方、第ⅱ類⑰は馬王堆本のみに見える独自異文であり、甲・乙両本の共通祖本として祖本ⅱが設定される。

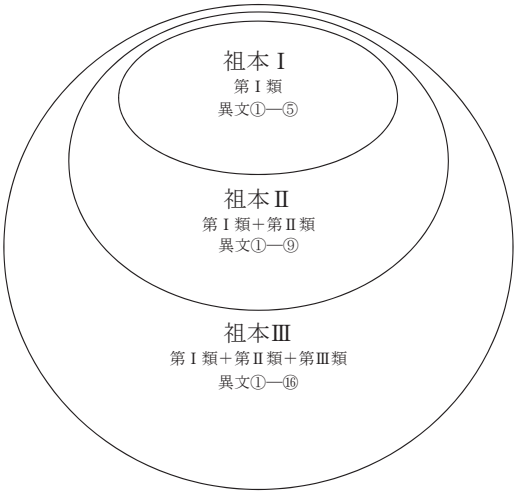

図1　祖本と異文との関係

⑰は馬王堆本以外の諸本には見いだされず、祖本ⅱは祖本Ⅰ（馬王堆・北大・厳遵・伝世共通）から分岐した別の系統線上に位置し、祖本Ⅱ（北大・厳遵・伝世共通）および祖本Ⅲ（伝世共通）とは系統を異にした独自の本文価値をもつことが明らかとなる。

以上の分析を踏まえて、『老子』諸本の系譜関係を整理すると図2のような系統図が得られる。このうち郭店本については後述のように不明な点が多く、取りあえず原初祖本の下位に位置づけたが、あくまでも便宜的な処置であることを断っておきたい。また厳遵本については異文統合の結果、北大本と同じ系統に属する可能性が指摘されるが（注7）、下篇（道経）の残缺により異文数が限定され、把握しがたい部分が多いため、系譜中に点線によって仮設した。さらに伝世本（王弼本・河上公本・傅奕本）については、いずれも祖本Ⅲの末流に位置し、簡帛諸本を中心とする系譜の建設を意図する本稿の目的とは直接的にかかわらないため、点線で結んで一括して示した。

以下では図2の系統図にもとづき、簡帛諸本を中心に系譜学的見地から考察を加えてみよう。

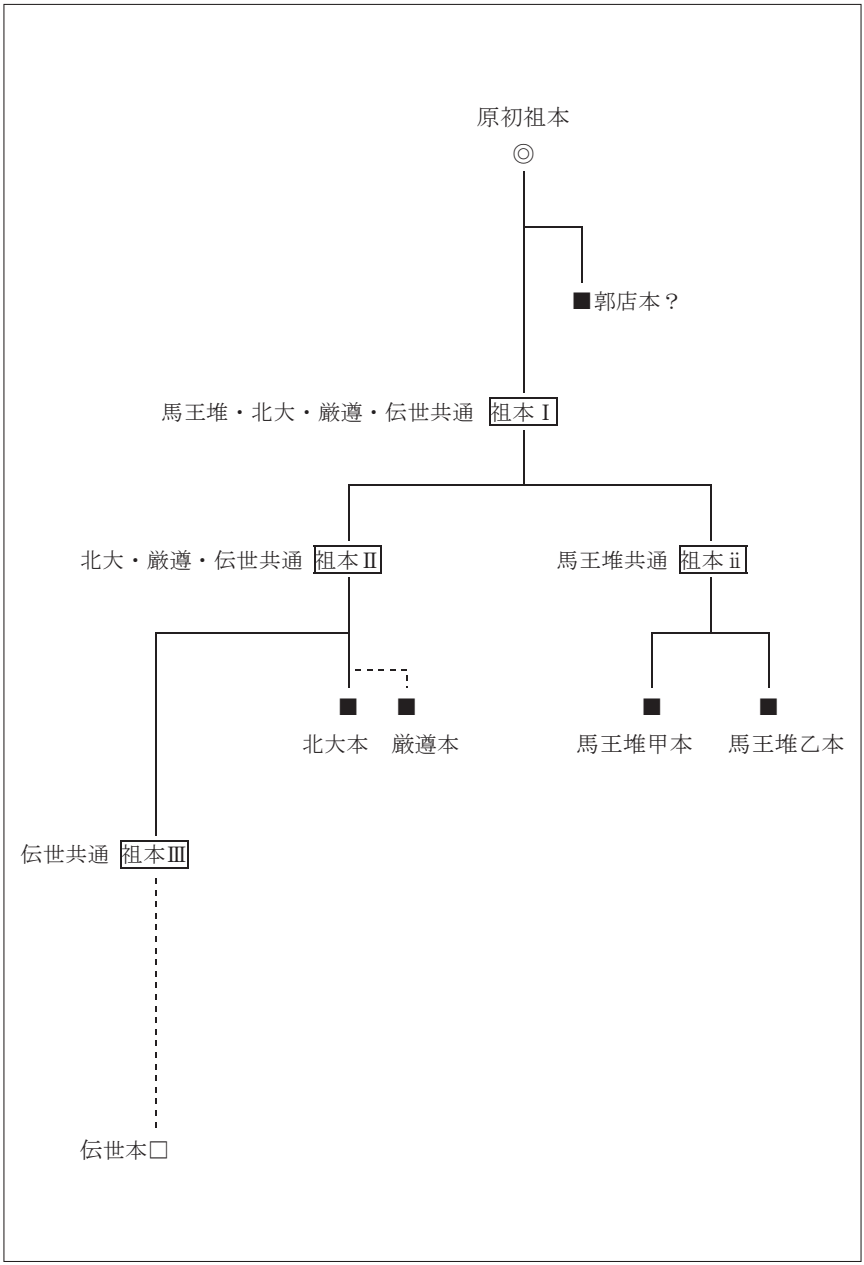
原初祖本
◎
■郭店本？
馬王堆・北大・厳遵・伝世共通
祖本Ⅰ
北大・厳遵・伝世共通
祖本Ⅱ
馬王堆共通
祖本ⅱ
北大本
厳遵本
馬王堆甲本
馬王堆乙本
伝世共通
祖本Ⅲ
伝世本□

図２　『老子』諸本系統図

四、郭店本と馬王堆本・北大本との関係

本章ではまず郭店本と馬王堆本および北大本との関係を見ていく。前章の表1に示したように、郭店本には第Ⅰ類から第Ⅲ類に掲げた異文は認められず、馬王堆・北大・伝世共通の祖本Ⅰに比べて全体的に増益の少ない簡素な本文をもつことが知られる。ただし郭店本には、他の諸本との間に句単位の異文の共有が見られないため、異文統合によって他の諸本との系譜関係を明らかにすることができない。そこで注目されるのが、以下に挙げる郭店乙組簡5と馬王堆本および北大本との間に見える本文の対応関係である。

A ［郭乙］……人之所魂（畏）、亦不可以不魂（畏）|。人〜態（寵）辱若驚、貴大患若身。……（簡5）

B ［馬乙］……人之所畏、亦不可以不畏人|。……（234下）（注8）
［北大］……人之所畏、不可以不畏人|。……（簡171－172）

C ［馬甲］龍辱若驚、貴大梡若身。……（113）
［馬乙］弄辱若驚、貴大患若身。……（217上）
［北大］寵辱若□、貴大患若身。……（簡152）

Aに示したように郭店乙組簡5は前半部分（通行本第20章）の末尾「……亦不可以不魂（畏）」の文末に短横の符号があり、その後に後半部分（通行本第13章）の本文「人態（寵）辱若驚……」が続いている。一方、馬王堆本および北大本を見ると、Aの前半部分に対応するBの末尾には、Aの郭店本にない「人」字（傍線部）があり、逆にAの後半部分に対応するCの冒頭には、Aの郭店本にある「人」字（波線部）がないという異同が認められる。

馬王堆本・北大本に見えるこのような現象は、郭店乙組簡5と同様の本文順序をもつテキストを材料として改編をおこなった際に、「人寵辱若驚……」から分章すべきところを誤って冒頭の「人」字を前段末尾の「……以不畏」の側に接続した結果生じた誤謬と見なされる。もっともこの異同については、郭店乙組簡5の文末符号の位置の方が誤りであって、馬王堆本や北大本の本文が原形であるとの見解も提起されているが、池田知久氏（注9）や郭沂氏（注10）が指摘するように、語法や用韻など

の面からみて、郭店乙組の符号に従うのが妥当であると考えられる(注11)。

馬王堆本と北大本とが共有する誤謬の誘因となった本文順序が郭店乙組簡5に認められるという事実は、両者のあいだに系譜関係が存在することを具体的に示唆する。同時にこの共通誤謬の存在は、馬王堆本と北大本とが共通の祖本をもつ血縁関係にあることを裏付けている。

ただし留意すべきは、現時点ではなお郭店本を構成する甲・乙・丙三組のテキストの性格を把握しがたいため、上述した系譜関係はあくまでも馬王堆本および北大本と郭店乙組簡5の当該の本文との間に限定される点である。したがって郭店乙組簡5との関係から、馬王堆本と北大本とに共通する祖本Ⅰとその材料となった原初祖本とのあいだに本文順序の相違が存在したことは窺知し得るものの、原初祖本にかかわるそれ以外の詳細については不明とせざるを得ない。

五、馬王堆本と北大本との関係

次に馬王堆本と北大本との関係を見てみよう。前述のように原初祖本の形態についてはなお十分に把握しがたいが、祖本Ⅰから分岐した祖本Ⅱに属する北大本および祖本ⅱに属する馬王堆本がいずれも徳道順(注12)の二篇構成であることから、この編成は少なくとも祖本Ⅰまでは溯ると見てよい。

それでは祖本Ⅰからそれぞれ分岐した、祖本Ⅱの系統に属する北大本と祖本ⅱの系統に属する馬王堆本とは、いかなる性格をもったテキストなのであろうか。

まず注目されるのは、祖本Ⅱに第Ⅱ類に掲げた⑥から⑨の異文が認められ、これらはいずれも増益によると見られる点である。これに対して祖本ⅱの異文は⑰のみであり、しかも高明氏(注13)によればこの異同は脱漏によって生じた可能性があり、仮にこの見解に従えば祖本ⅱには句単位におよぶ本文の増益は見られないことになる。⑰の異同の原因についてはなお異論の余地もあると思われるが、いずれにしても祖本ⅱは祖本Ⅱに対して比較的増益の少ない本文を有すると言ってよく、この点は馬王堆本と北大本との系統的性格の違いを考える上で注目に値する。

次に指摘されるのは、馬王堆本と北大本との各篇内における章(注14)の順序(章次)に、以下のような三箇所の異同(傍線部)が認められる点である(比較の便宜のために対応する通行本の章数を算用数字で示す)。

馬王堆本　徳：38・39・41・40・42―66・80・81・67―79
　　道：1―21・24・22・23・25―37
北大本　上経：38―81
　　下経：1―37

この対比からも明らかなように、前述した篇の逆順を除けば、北大本の各篇内における章次は基本的に通行本のそれと合致している。これらの異同は、すでに北大本が発見される以前の段階で、馬王堆本と通行本との相違点として認識され、その優劣について検討が加えられてきたが、北大本の発見によって、馬王堆本と通行本との相違として理解されてきた章次の異同を、馬王堆本と北大本という西漢期における対立としてとらえ直す必要が生じたのである。

それでは先行研究を踏まえながら、あらためて三箇所の異同を個別に見ていこう。行論の便宜上、まず24・22・23を取り上げる。金谷治氏(注15)は馬王堆本と通行本との異同について、24と22とは以下に引く馬王堆本（引用は乙本による）のように、もともと一章として連続したものであったとし、その根拠として傍線部分の語句に明瞭な対応関係が認められることを指摘している。

炊者不立、自視者不章、自見者不明、自伐者无功、自矜者不長。亓在道也、曰粽食贅行、物或亞之、故有欲者弗居。（24）曲則全、汪則正、洼則盈、弊則新、少則得、多則惑。是以耶人執一以爲天下牧。不自視故章、不自見也故明、不自伐故有功、弗矜故能長。夫唯不爭、故莫能與之爭。古之所胃曲全者、幾語才。誠全歸之。（22）

この部分は「自視者不章、自見者不明、自伐者無功、自矜者不長」である「粽（餘）食贅行」者に対して、「耶（聖）人」は「不自視故章、不自見也故明、不自伐故有功、弗矜故能長」であると説く内容をもつ。「自視者不章」に対して「不自視故章」のように、対応する後段の句にすべて「故」字が加えられているのは、これらが明らかに前段の句を前提として導かれたものであることを示している。

一方、北大本の各章の本文は、以下のように句の並びや文字の一部に若干の異同が見られるものの、基本的には馬王堆本と一致する。ところが北大本の章次は、通行本と同様22・23・24であるため、通行本に対する馬王堆本の優位性は、そのまま北大本に対しても当てはまる（以下、北大本の引用における各章冒頭の墨点は、竹簡

に付された章号を示す）。

・曲則全、枉則定、洼則盈、敝則新、少則得、多則或。是以聖人執一以爲天下牧。不自見故明、不自視故章、不自發故有功、弗矜故長。夫唯無爭、故天下莫能與之爭。古之所謂曲全者、幾語邪。誠全歸之也。（22）

・希言自然。（中略）信不足、安有不信。（23）

・炊者不立、自見者不明、自視者不章、自發者無功、矜者不長。其在道也、斜食癹行、物或惡之、故有欲者弗居。（24）

このような24と22との対応関係を踏まえれば、馬王堆本および北大本の共通祖本である祖本Ⅰは24・22の順序であった可能性が高く、馬王堆本の祖本ⅱが祖本Ⅰを継承するのに対し、北大本の祖本Ⅱでは祖本Ⅰの章次に異同を生じていたと推測される。

続いて41・40・42の検討に移ろう。まず馬王堆本の本文を引用する（引用は乙本により、枠で括った文字は甲本により補ったことを示す）。

上□□道、堇能行之。中士聞道、若存若亡。下士聞道、大芙之、弗芙、□□以爲道。是以建言有之曰、明道如費、進道如退、夷道如類。上德如浴、大白如辱、廣德如不足、建德如□、質□□□。大方无禺、大器免成、大音希聲、天象无刑、道褻无名。夫唯道、善始且善成。（41）反也者道之動也。弱也者道之用也。天下之物生於有＝□於无。（40）道生一＝生二＝生三＝生□□□□□□□□□中氣以爲和。（以下略）（42）

この異同は、高亨・池曦朝氏（注16）によって「帛書本可以訂正今本章次之誤」の例に取り上げられたものであり、両氏はその根拠として40と42とが宇宙形成過程を説明する内容として緊密な連繫をもつことを指摘している。また金谷氏も高亨・池曦朝氏の見解を支持した上で、41の末尾と40の初めの二句との間にも実践的な道の説明として緊密な連繫が見られるとし、通行本に対して馬王堆本の順序が優れていることの傍証としている。

一方、北大本を見ると各章の本文は馬王堆本とほぼ一致するが、北大本の章次は以下のように通行本と合致しており、高亨・池曦朝氏および金谷氏の指摘する馬王堆本の優位性は、そのまま北大本に対してもあてはまる。

・反者道之動也。弱者道之用也。天下之物生於有＝生於無。（40）

・上士聞道、堇能行。中士聞道、若存若亡。下士聞道、大笑之、弗笑、不足以爲道。是以建言有之曰、明道如沬、進道如退、夷道如類。上德如谷、大白如辱、廣德如不足、建德如偷、桎眞如輸。大方無隅、大器勉成、大音希聲、天象無刑、道殷無名。夫唯道、善貸且成。（41）

・道生一＝生二＝生三＝生萬＝物＝負陰抱陽、中氣以爲和。（以下略）（42）

ただし41・40・42について留意すべきは、前述の24・22の場合とは異なり、優劣を判定するための明確な根拠に乏しい点である。確かに馬王堆本には、通行本および北大本に比べて緊密な連繫性が認められる。しかし、それをもって通行本の順序を「章次之誤」と断定することはなお早計であろう。しかも注意を要するのは、40が郭店甲組簡37に、41が郭店乙組簡9―12にそれぞれほぼ同じ内容の本文として見いだされる点である。とくに郭店甲組簡37には、以下のように前後に墨方点が付されており、すでに戦国期において40が独立したひとまとまりの章として認識されていたことを示している。

■返也者、道僅也。溺也者、道之甬也。天下之勿生於又、生於亡■。（郭店甲組簡37）

もとより郭店本のこうした状況は必ずしも馬王堆本の優位性を否定するものではないが、ここではしばらく祖本Ｉとの関係についての判断を保留し、待考としておきたい。

最後に66・80・81・67を取り上げる。この異同は北大本および通行本では徳経の末尾にある80・81の二章が、馬王堆本では66と67との間に位置するというものである。すでに金谷氏も指摘するように両者の間に優劣を決める根拠を見いだし難く、いかなる理由でこのような異同が生じたのかは不明とせざるを得ない。ただ金谷氏は不明としながらも、「上・下篇の逆順であることと関係があるかもしれない」と述べているが、道徳順の通行本と同じ章次が新たに徳道順の北大本にも見られたことから、その可能性は低いと言えよう。

80・81の異同にこれといった理由が見当たらないことを重く見れば、末尾の二章を何の理由もなく66と67との間に移したとは考えにくく、もともと66と67との間にあった二章が脱落したため、篇の末尾に加えたとみる方が比較的理解しやすいように思われる。ただしこれもも

とより憶測の域を出ず、祖本Ⅰとの関係については不明とせざるを得ない。

このように馬王堆本と北大本との章次に認められる三箇所の異同のうち、現時点において祖本Ⅰとの継承関係を裏付け得るのは、馬王堆本の一箇所（24・22・23）のみという結果となったわけであるが、少なくともこの一例からも、本文の増益と同様、祖本Ⅱの系統に属する北大本にくらべて、祖本ⅱの系統に属する馬王堆本が祖本Ⅰを比較的よく継承する側面をもつことがうかがわれる。

六、漢代『老子』諸本の系統と伝世本との関係

最後に漢代『老子』諸本の系統と伝世本との関係について考察を加え、本稿の結びとしたい。

これまでの検討を踏まえれば、漢代における『老子』テキストについて、二つの系統の存在が指摘される（前掲図2参照）。その一つは馬王堆・北大・厳遵・伝世共通の祖本Ⅰから北大・厳遵・伝世共通の祖本Ⅱを経て伝世共通の祖本Ⅲへと展開する北大本系統である。上述のように系譜が下降するにしたがって本文が累加していく状況が認められ、この系統が言わば流布本として『老子』テキストの主流を形成したことがうかがわれる。とくに注目すべきは、武帝期の書写と推定される北大本に、篇の順序は逆（徳道）順であるものの、伝世本と同様の章次が認められ、しかもそれは祖本Ⅱまで溯ると見なされる点である。したがって、伝世本へと至る『老子』テキストの〝定型〟化は、祖本Ⅱの段階ですでに一定の到達をみていたと言うことができる。

ところで前章のはじめに述べたように、徳道順の二篇構成は少なくとも馬王堆本および北大本の共通祖本である祖本Ⅰまでは溯るとみられ、後に通行本に見えるような道徳順へ篇次の逆転が生じたと推測される。ここでその理由および時期について少しく言及してみたい。

まず押さえておきたいのは、すでに指摘されているように道経・徳経の篇名は各篇冒頭の本文に由来するものであって、各篇が個別に有する思想内容や主題に由来するものではないという点である。したがって篇の逆順の理由を内容面に求めることは難しく、問題は主として篇名の側にあると見ることができよう。

簡帛諸本の篇題に注目すると、現在知られる漢代の実例は二例であり、馬王堆本では乙本の各篇の篇末に本文に続いて「德 參千卌一」、「道 二千四百廿六」との尾題・篇字数が見え、一方、北大本では簡2背面に「老子

上経」、簡124背面に「老子下経」の篇題が認められる。この二種の形式の存在は文献資料からも知られていたが、すでに指摘されているように「上」・「下」の篇名が先行し、「徳」・「道」の篇名は後に各篇冒頭の本文から付けられたものと考えられる。とくに留意されるのは、馬王堆乙本によって、西漢初期に「徳」・「道」の篇名が行なわれていたことが知られた点である。

こうした状況を踏まえれば、「上」・「下」の各篇に「徳」・「道」という固有の篇名が付与されたことによって、漢初以前から行なわれていた熟語である「道徳」(注17)の語順とのあいだに衝突が生じ、その結果、熟語の語順に合わせるかたちで、篇次の逆転が起こったと推測される。

その時期については十分に把握しがたいが、仮に『七略』逸文(注18)にみえる上経・下経の章数に依拠すれば、劉向定著本は道徳順とみられることから、徳道順から道徳順への転換は、祖本Ⅱから祖本Ⅲへ至る過程で生じたものと見なされる。この推測にしたがえば、『老子』の場合、すでに劉向・劉歆以前の段階で各篇内における〝定型〟化が進行しており、二劉が果たした『老子』テキスト史上の主要な役割は道徳順の篇次の確立にあった、と言えるのではないだろうか。

このように変容を遂げる北大本系統に対して、別系の位置を占めるのが、馬王堆・北大・厳遵・伝世共通の祖本Ⅰから馬王堆共通の祖本ⅱへ展開する馬王堆本系統である。第ⅱ類に挙げたように祖本ⅱにおける句単位の独自異文は⑰のみであり、しかもこの異同は増益ではなく、脱漏によって生じた可能性が指摘されている。また馬王堆本と北大本および伝世本との間に認められる三箇所の章次の異同のうち、少なくとも一箇所については馬王堆本が祖本Ⅰを継承すると見なされ、馬王堆本系統は北大本系統に比べて比較的変容の度合いの少ない系統と考えられる。したがって一定の〝定型〟化が進行した段階を示す北大本に対して、馬王堆本は言わば〝定型〟化途上のテキストとして位置付けることができ、甲乙両本共通の祖本ⅱの再建、さらには二篇本の源流と見なされる祖本Ⅰの実態を明らかにする上で独自の価値をもつと言えよう。

馬王堆本系統と北大本系統との間に認められる上述のような差異が生じた原因としては、馬王堆本と北大本との書写時期の相違、各系統が行なわれた地域や学派との関連などが考慮されるが、この点については本文の異同に関するさらに詳細な分析を通して明らかにしていく必要がある。

注

（1）韓巍「西漢竹書《老子》的文本特徴和学術価値」（北京大学出土文献研究所編『北京大学蔵西漢竹書［貳］』二二四頁、上海古籍出版社、二〇一二年）。

（2）異文統合には北京大学出土文献研究所編『北京大学蔵西漢竹書［貳］』所收の「老子釈文 注釈」および「《老子》主要版本全文対照表」に準じて、北大本・郭店本・馬王堆甲本・馬王堆乙本・王弼本・河上公本・厳遵本・想爾注本・傅奕本の九種のテキストを用い、伝世本については併せて島邦男『老子校正』（汲古書院、一九七三年）を参照した。なお各テキストの出処については、「老子釈文 注釈」の「説明」（一二一―一二二頁）および「《老子》主要版本全文対照表」の前言（一七三頁）参照。

（3）［馬乙］は「是以能繫而不成」の前に「夫唯不欲盈」の句を脱すると見られる（高明『帛書老子校注』二九七―二九八頁、中華書局、一九九六年参照）。

（4）「亓事好長」に対応する句は［郭店］以外の諸本では冒頭の第三句目にあり、郭店本と他の諸本とで句の位置が異なる。

（5）［北大］には「果而毋得已」の後に「是胃果而不强」の句がないが、郭店本・馬王堆本および伝世諸本はすべて有しており、北大本の誤脱と見なされる。

（6）缺失部に「非君子之器。不」の六字（句点を除く）を補う点については、聶中慶『郭店楚簡《老子》研究』二九八―二九九頁（中華書局、二〇〇四年）の見解に従う。

（7）厳遵本と北大本との関係については、丁韓巍「西漢竹書《老子》的文本特徴和学術価値」（『北京大学蔵西漢竹書［貳］』二二〇頁、前注（1）参照。なお表1の第Ⅲ類に示した厳遵本にない異文⑩・⑪のうち⑩についてはすでに韓巍氏によって指摘されている。

（8）馬王堆甲本は当該箇所に缺失が見られるため乙本のみを掲げた。

（9）池田知久「尚処形成段階《老子》最古文本」（陳鼓應主編『道家文化研究』第十七輯、一七八―一七九頁、一九九九年、池田知久著・曹峰訳『池田知久簡帛研究論集』三六一―三六二頁、中華書局、二〇〇六年再收）。

（10）郭沂『郭店竹簡與先秦学術思想』一〇八頁（上海教育出版社、二〇〇一年）。

（11）この問題に関する議論の詳細については、丁四新『郭店楚竹書老子校注』二八一―二八五頁・二八七頁（武漢大学出版社、二〇一〇年）参照。

（12）以下便宜上、篇の順序の表示には馬王堆乙本の篇名を用いる。

(13) 高明『帛書老子校注』一九一頁（中華書局、一九九六年）。

(14) 以下の「章」の語は、本文の順序の違いを説明するための便宜的手段として、〝本文のひとまとまり〟の意味で用いており、必ずしも当該テキストが章分けされていることを意味するものではない。ちなみに馬王堆甲本には、主として徳篇を中心に墨点による区分が認められるもののの一貫した分章形式とはなっておらず、乙本には、分章を示すような符号や改行等は認められない。

(15) 金谷治「帛書『老子』について―その資料性の初歩的吟味―」（木村英一博士頌寿記念事業会『中国哲学史の展望と模索』一八九―一九一頁、創文社、一九七六年、『金谷治中国思想論集 中巻 儒家思想と道家思想』二九七―二九八頁、平河出版社、一九九七年再収）。

(16) 高亨・池曦朝「試談馬王堆漢墓中的帛書《老子》」（『文物』一九七四年第十一期、五頁）。

(17) 「道徳」の熟語の成立時期については明確に把握し難いが、『韓非子』五蠹篇や『荘子』駢拇篇・『礼記』曲礼上篇などに用例が認められることから、漢初以前には行なわれていたと見なされる。

(18) 「《老子》、臣向定著二篇八十一章、上經三十四章、下經四十七章」宋董思靖《老子集解叙》、「劉歆《七略》劉向讎校中《老子》書二篇、……定著二篇八十一章。上經第一、三十七章、下經第二、四十四章。」謝守灝《混元聖紀》巻三。（鍾肇鵬《七略別録考》）（姚振宗輯録・鄧駿捷校補『七略別録佚文 七略佚文』五二頁・一八九頁、上海古籍出版社、二〇〇八年）。

【附記】 本稿は二〇一三年十月二十五日―二十六日に北京大学において開催された北京大学中国古代史研究中心・北京大学出土文献研究所主辦「〝簡帛《老子》与道家思想〟国際学術研討会」に提出した拙稿「簡帛《老子》諸本的系譜学考察」にもとづく。なお本研究はＪＳＰＳ科研費 24520466 の助成を受けたものである。